

懷徳堂学派の『論語』首章解釈

—「時に之れを習ふ」の理解—

黒田 秀教

はじめに

「学びて時に之れを習ふ、亦た説しからずや」は、最も人口に膾炙する孔子の言葉であろう。古来親しまれてきた『論語』の冒頭であるが、「学」とは何ぞ、「習」は如何、はたまた「学」と「習」との関係は如何様にといい具合に、その解釈は読者の数だけあると言つても過言ではない。その含蓄の深きこそが時を超えて愛好されてきた所以であろうが、本論で注目する「時に之れを習ふ」も、その「時」の解釈に揺れがある句である。『論語注疏』において疏を書いた宋の邢昺は皇侃に基づいて「時」の解説をするのであるが、それからして「学には三時有り」として三つの「時」を列挙している。即ち、年齢に適應したことを学ぶという「身中の時」、四季折々に相応しいことを学ぶという「年中の時」、一日の生活のなかで行動の折々にそのことを学ぶという「日中の時」というものである(注1)。

では、現代における理解はどのようなか。今試みに、大家による日本語訳

をいくつか挙げてみよう。

加地伸行

「いつでもそれが活用できるように」常に復習する。(注2)

金谷治

適当な時期におさらいする。(注3)

宮崎市定

時を決めて(弟子たちが集まり)温習会おさらいをひらくのは……。 (注4)

宇野哲人

絶えずこれを復習して熟達するようにする。(注5)

このように訳者によって表現はまちまちであるものの、理解の方向性が二つに大別し得ることに気付く。即ち、「常に、絶えず」というように、復習を恒常的に絶え間なく行い続けるとするか、もしくは「時を決めて、適当な時期に」というように、機会がある折に復習をするかである。

解釈の方向性が二つに分かれていると聞けば、それは当該箇所を理解するために参考とした注釈の別であろうと、斯界の人間であれば直ちに想起し得よう。事実、この箇所の理解には伝統的注釈も大別して二つの方向性があり、今挙げた大家もいずれを重視したかによって訳出に相違が生まれていると考えられる。

そこで本論では、『論語』首章の「時に之れを習ふ」の句について、朱子を中心とした伝統的な注釈を確認した後、近世後期の大阪にあつて町人相手に儒学を教えていた懷徳堂では如何様に解釈していたかを検討してゆく。これにより、懷徳堂が庶民に対して如何なる学習観念を提示していたかが明らかになるう。

一 朱子の解釈

朱子の解釈を見る前に、念のために古注を確認しておこう。何晏の『論語集解』では、「時に之れを習ふ」に関わる注釈は次のようになっている。

王曰く、「時」とは、学ぶ者は時を以て之れを誦習す。誦習するに時を以てし、学の廢業する無きは、説憚為る所以なり」と。(『論語集解』学而篇(注6))

何晏は王肅の言を引き、「時」とは学習者が「時を以て」繰り返し読み学ぶことであるとする。この「時を以て」の理解は、同じ学而篇における孔子の言葉が参考になるう。

子曰く、「千乗の国を道みちくに、事を敬つしみて信あり、用を接して人

を愛し、民を使ふに時を以てす」と。

包曰く、「民を作使するに必ず其の時を以てし、農務を妨奪せず」と。(『論語集解』学而篇(注7))

民を使役するには「時を以て」しなければならないが、何晏は包咸の言葉を引き、具体的には農作業を妨害しないことであるとする。これは、春の種播きや秋の収穫などの農繁期を避けるということであり、これを要するに、相応しい適切な時期を見計らつて民を使役するのである。

すると、これを参考にすれば、首章の「時」字も何晏の理解では、適切な時を見計らつて繰り返し読み学ぶということになるうし、何晏自身の説明はここまでである。邢昺は皇侃を引き、その相応しい時について更に詳細に説明しているのであるが、これこれの時には何それを学ぶというように、特定の時期には特定の学ぶ事柄があるという理解をしており、実は何晏を忠実に敷衍しているわけではない。但し、いずれにせよ、学ぶ者は常に学び続けるなどといった強い緊張感や義務感はさほど醸成されていない。では、いよいよ朱子の理解を確認しよう。朱子『論語集注』では次のように解説されている。

「習」は、鳥の数しば飛ぶなり。学の已まざること、鳥の数しば飛ぶが如きなり。……既に学びて又た時時之れを習へば、則ち学ぶ所の者熟して、中心喜説し、其の進むこと自ら已む能はず。程子曰く、「習は、重ねて習ふなり。時に復た思釋し、中に浹洽すれば、則ち説ぶなり」と。又た曰く、「学者將に以て之れを行なはんとするや、時に之れを習へば、則ち学ぶ所の者は我れに在り、故に説ぶ」と。

謝氏曰く、「時に習ふとは、時として習はざる無し。坐するに戸の如

くすとは、坐する時に習ふなり。立つに齋の如くすとは、立つ時に習ふなり」と。『論語集注』学而篇（注8）

朱子は「習」字について、鳥が空を飛ぶことに譬えることで、学習とは永続して行うものであるとする。なお、この鳥の比喩は『朱子語類』卷二十において「ただこれは、飛び終わってまた飛ぶ（注9）」と説明されており、同じ動作を繰り返し繰り返し行うという意味に過ぎない。そして「時」字については自らの言葉によって「時時」とし、時の経過に従って絶え間なく既習のことを復習することとし、これは程子の言葉「重ねて習ふ」によっても説明される。学んだことを反復して思い巡らせることで身の内にしみわたるかのように我がものとなるということであるが、有り体に言えば繰り返す行い反復学習ということになる。当該箇所の解釈として朱子が反復学習を重視していたことは、『朱子語類』を見れば一目瞭然である。

問う、「時に習うとはどういうことですか」と。「朱子は」答えた、「上」字を書くのに、一つ書き終えたら、また一つ書き、そしてまた一つ書くようなものである」と。その時の先生は逐一この「上」字を手のひらにお書きになっていた。『朱子語類』卷二十・論語二・学而時習之章（注10）

この朱子の解説からして、反復学習とは思索に限定されるのではなく、写字のように行動を伴うものでもあることが理解されよう。

ところが、朱子は反復学習とは別の理解を、謝良佐の言葉によって提示している。謝良佐は『礼記』曲礼上篇の記述を踏まえ（注11）、尸のように坐るときにはきちんと坐ることを、齋戒して立つときにはきちんと立つこ

とを習うというように、その動作を習うのに適切な行為をしている時に習うこととしている。これは何晏・皇侃を踏まえた邢昺の理解に近い。その上で、起居や儀礼の折々に行為を通じて或る事柄を習うのであれば、結果的には何がしかのことをいつも習い続けており、常に学習状態にあるということになる。そこで、「時として習はざる無し」という学習観念が述べられている。

結局のところ、程子にせよ謝良佐にせよ、いずれも常に習っている状態が持続しており、途切れなく学習し続けるというリゴリスティックな学習観が根柢にある。朱子が「時」字を「時時」と解説するのも、二説が共通土台としているリゴリスティックな学習観念を前面に出すためであろう。聖人になるべく学問をするのであるから、一時^{ひととき}たりとも気を抜いて学問をしない時間を設けることは許容されないのである。

しかし、同じ事を繰り返し復習することと、その折に触れてふさわしい事柄を習ってゆくこととは、教誡としては重なり合うものではなく、やはり別個の理解であると言わざるを得まい。そして、このことを明確に指摘したのが、荻生徂徠『論語徴』であった。

二 荻生徂徠の朱子批判

徂徠学を樹立してからの荻生徂徠は朱子学を徹底的に批判しており、『論語』解釈においては『論語徴』にそれが結晶している。「時に之れを習ふ」の句では、徂徠は朱子を批判して次のように言う。

「習」を「重習」と訓むも、亦た纏繞為り。学習は固より重複の義有り。然れども重複は豈に能く学習の義を尽くさんや。「時に之れを

習ふ」は、既に以て「時時」「重習」すと為し、又た以て「時として習はざる無し」と為す。朱子の解経は、特操無き者と謂ふ可きのみ。

「時時」「重習」は、僅かに童子の句読を受くる者の事と為す。「時」として習はざる無く」んば、則ち天子諸侯の礼、宗廟軍旅冠昏喪祭は、皆な得て之れを習ふ可からず。故に唯だ「坐するに尸の如くし、立つに斎するが如くす」に、其の説の窮することを見る可きのみ。(荻生徂徠『論語徴』甲(注12))

徂徠は、朱子が「時に之れを習ふ」に二つの解釈を提示したことを、無節操であるとしてその態度を批判する。徂徠に言わせれば、学習という行為にはそもそも反復して行うという意味が含まれているのであるから、繰り返し何度も反復することであると説明しても経解として意味をなさない。そうした反復学習は児童に經典の文章を覚えさせるといふ、知識の詰込みにしは通用しないからである。

それよりも徂徠が重視するのは、儀礼の習熟である。身体的作法を身につけるためには、その動作を行う時に実践的に習うしかない。そこで徂徠は謝良佐の説明を称賛するのである。

かくして徂徠は「時に之れを習ふ」の理解について、次のように己の見解を述べている。

「時に之れを習ふ」は、王肅曰く、「時を以て之れを誦習す」と。伝に曰く、「春は誦し、夏は絃し、秋は礼を学び、冬は書を読む」と。

其の之れを習ふも亦た之の如し。(荻生徂徠『論語徴』甲(注13))

徂徠は何晏の引く王肅説を是とし、それを敷衍して『礼記』文王世子篇

における四季ごとの学習内容を参考として挙げる(注14)。もともと、既に見てきたように、こうした理解は何晏というよりも、むしろ皇侃・邢昺に通じるものである。

こうしてみると、確かに徂徠は反復学習を否定したわけではない。しかし、經典解釈とは經典の記述内容を明らかにするという建前を掲げつつ、一方で經典の言葉を藉りて自己の思想を語る行為である。朱子が絶え間ない反復学習を当該箇所^の注釈としたのも、反復学習を重要視していたからに外ならない。

ところが、徂徠はそれを注解として不適としてしまうのであるから、その時々に応じた学びに比べれば、反復学習を相対的に軽視する嫌いがあつたと評せよう。

また、朱子が程子の言葉を引いて語っていた思索的復習も、徂徠はこれを除外していることに気付く。徂徠が挙げている具体例はいずれも身体動作に関わるものであり、実践的行為こそが「時に之れを習ふ」の理解であった。そして、朱子のように途切れる事の無い学習状態の持続を殊更意識付けることもしておらず、朱子学には存在していたリゴリスティック的学習観念が、徂徠にあつては後退していることに気付く。

三 懷徳堂黎明期における解釈

前節まで何晏、朱子、徂徠の「時に之れを習ふ」理解を見てきたが、それを踏まえて懷徳堂の理解を検討してゆこう。

一番手は、初代学主の三宅石庵が享保十一年(西暦一七二六年)に懷徳堂の官許取得を記念して行った記念講義の講義録『論孟首章講義』である。

その講義において、石庵は次のように説明している。

習ハ手前ニテトクトナラフコト也。ナレナラフコト也。時ハ時ヲリ
ゴトニウチヲカヌコト也。……一トホリ学ヒテモ、手前ニテ時オ
リニトリ出シテハ、ナレナラヒ、ヒタトクリカヘシ、思フテ見
タリ行ナフテ見ルトキハ、始メシブリテスマヌコトモ、イツゾノホ
ドニハホツコリト合点ガイクモノ也。(『論孟首章講義』(注15))

石庵は、一通り学んだことを、折を見ては「ヒタト」繰り返し繰り返し
思ったり行ったりすることであると解説している。折衷学派の面目躍如と
いうべきであろうか、石庵の説明は朱子を完全には襲っておらず、朱子の
挙げた二つの理解の内、反復学習のみを口にしており、謝良佐流の理解に
は言及していない。これが懷徳堂黎明時における『論語』講義であった。

小川環樹によると、徂徠が『論語徴』の執筆を計画して着手したのが享
保元年(一七一六)ごろ、確認されている最古の刊本は元文二年(一七三
七)であるが、刊本以前にも改稿途上の稿本が書写によって広まっていた
という(注16)。石庵がどこまで徂徠説を聞き及んでいたかは不明であるが、
徂徠と全く逆のことを口にしてしている点は興味深い。

ところで、懷徳堂黎明期の『論語』講義について、関連資料がもう一つ
ある。それは『論語聞書』であり、石庵と五井持軒とによる『論語』講義
である(注17)。懷徳堂における講義ではなく、懷徳堂設立前のものである
が、石庵と持軒とは交流が深く、また持軒の子である蘭洲が、後に懷徳堂
における学風を朱子学に改め、反徂徠学という旗幟を鮮明にしている。懷
徳堂黎明期の『論語』解釈を探る上で重要な資料であると言える。

『論語』首章が収録されている『聞書』巻一は宝永三年(一七〇六)の
講義録であり、「時に之れを習ふ」の句に関連する持軒の説明は次のような

ものであった。少々長いが、行論上必要となるので次に掲げよう。

▲時—時々刻々ナリ。……

習：—ヒヨコノトビナラフコトナリ。■数—サイ／＼トブナリ。ヒ
ヨコハチク／＼トトビナラフテ、後ニタカトビスルナリ。ヒヨコハ
スコシヅ、サイ／＼トブナリ。ソノヤフニ、ヒタモノスル故ニ、後
ニ功ガユキテ、タカトビスルナリ。ヒタモノトシテ見ヌト、大トビ
ナラヌナリ。学者モヒタモノ道ヲ思フテ見タリ行フテ見ルト、チク
／＼シアガリテ、後ニ君子ニモナルナリ。ヒタモノナラヒ熟スルナ
リ。■不已カンダンセンナリ。ヒタモノカンタンナクスルト、君子
ニナルナリ。■……

既学—学ンダコトヲ時々習フト熟スルナリ。熟ハナマデナキコトナ
リ。火ニテ料理シテ熟スルナリ。学ンデモナラハヌト、ナマナリ。
ワガ身ニヒタモノナラフト熟スル故ニ、ウマミツクナリ。ソコデヨ
ロコブナリ。学ンダコトヲヒタモノ熟スル故ニ、自然ト心ノ中ヨリ
ヲモシロキト思フ心出ルナリ。……

程曰—程子ハ知テトキ玉フナリ。道理ヲヒタスラカサ子ド、思ヒタ
ツ子、イロ／＼ニ發明スルナリ。習ヲカサヌルトヨムナリ。道理ヲ
知ツタコトヲ、ヒタモノワガ心デ發明シテ道理ヲトクト、心ノ中ニ
得ナリ。……

又曰学者：—道ヲ学ブハ行ナフタメナリ。時々刻々道理ヲ思ヒタツ
子テ浹洽スルト、学ブ所ワガモノニナルナリ。ソコデヨロコブナリ。
……

謝曰時習：—コレハ行ナヒテトクナリ。時々行ナフナラヒアルトナ
リ。●谷沢氏云、行主トシテトクハ、孔門ノ教行ノヲモタルコトヲ

示シタモフモノナリ。■坐―コレ『礼記』ニアリ。■戸祭ノ時ニ神ノ代ニナリテ、祭トヲウクルナリ。尸、祭リノ時、神ノ名代ヲスルコトナリ。キツトワ、シミ坐シテアルナリ。■斎、ツ、シムコトナリ。立ツニウカトセズ、モノイミノトキノ如ク立ツテ居コトトナリ。立ツニモ居ニモ、ツ、シミテ、ウツカリトスルナトナリ。人ノ身ニナスワザニ、時々ニナラヒアルナリ。ソノ時々ニナラヒガアルナリ。斎大事ノコトヲスル時ニトソコモリ、心ヲヲサメアルヲ、モノイミト云フナリ。〔論語聞書〕卷一（注18）

石庵と異なり、持軒の『論語』講義は概ね朱子に忠実であり、反復学習と謝良佐流のその時々習いと、両者を押さえている。但し、持軒が朱子の「鳥」をヒヨコに置き換えて説明している点には留意すべきである。『論語大全』当該箇所「厚齋馮氏曰く」とし、「習は、鳥の雛巢を離れんと欲して飛ぶを学ぶを之れ学と称す」とあるのを踏まえたのであろう（注19）。持軒は、ヒヨコは飛ぶ際に「ヒタモノ」即ちひたすらに飛ぶことを練習するため、やがて高く飛べるようになるという。朱子においては単に鳥が飛んでは止まり飛んでは止まりというように、動作の反復が言い表わされていたに過ぎないものを、持軒は同じく鳥の比喻を用いて能力の成長・獲得について述べ、そのためには専一に同一行動の繰り返しが必要であるとするのである。

一方、謝良佐説に関する説明は祖述したに過ぎず、さわり程度となっており、「ヒタモノ」をしつこいまでに繰り返し返して強調し、様々な比喻を用いて説明する反復学習の重要性に比べると、いささか拍子抜けするものになっている。つまり、反復学習を重視するという点において、持軒も石庵と方向を一にしていたと評せよう。このように懐徳堂黎明期の「時に之れを

習ふ」の句の理解は、絶え間ない反復学習を主軸としていたのであった。

四 五井蘭洲・中井竹山の徂徠批判

懐徳堂の学風を朱子学とし、反徂徠の旗幟を鮮明に掲げたのが、持軒子の蘭洲である。その名著『非物篇』では、徂徠『論語微』を朱子学擁護の立場より論駁している。

首章の「時に之れを習ふ」について朱子が二つの解釈を提示し、徂徠がこれを節操に欠けると批判したことは既に見てきた通りである。そして、案の定、蘭洲は「時に之れを習ふ」の句において、徂徠の見解を批判している。

徂来又た曰く、「時に之れを習ふ」、「伝」に曰く、「春は誦し、夏は絃し、秋は礼を学び、冬は書を読む」と。其の之れを習ふも亦た之の如し」と。是れ学究の見なるのみ。孔門人に教ふるに、豈に此くの若く之れに拘はらんかな。王心麟曰く、「伏生『太伝』に云へらく、周公三王の道を兼ねて、以て春秋冬夏に施すを思ふ」と。其の説陋なり」と。今此の解も亦た伏生の毫に倣ふなり。〔非物篇〕卷一（注20）

蘭洲は、徂徠が春夏秋冬それぞれに相応しい学びがあるとしたことについて、王心麟『困学紀聞』卷八における伏生批判を持ち出し（注21）、徂徠に駁している。確かに、謝良佐の説はある行為をする時にその動作について習うというものであるから、それを時期ごとに習う事柄が決まっているとし、四時ごとの具体的な学びを挙げてゆくのは牽強付会に過ぎ、主旨のすり替えでもある。

しかし、この部分における蘭洲の徂徠批判は、どこか物足りない感じがする。何故ならば、徂徠による朱子批判の根幹は、朱子が二つの解釈を持ち出したことを節操が無いとしたことにあった。このような批判をするかには、当然ながら徂徠は解釈の一つに絞る必要がある。そこで、反覆の意味はそもそも「学習」の字義に含まれているから解説として不十分であるとし、謝良佐説に基づいてその時々々に学ぶべきことがあるとしていた。よって、謝良佐が坐る時、立つ時というように起居や儀礼行為の折々にその動作を習うとしたことを、春夏秋冬といった時期それぞれに応じた習いがあるとして、蘭洲はこの枝葉のみを批判しているのである。

徂徠が朱子を批判して反復学習の重要性を後退させたことについて、蘭洲は特に言い立てていない。このことから、蘭洲が実は徂徠に同調していたと判断するのは武断に過ぎよう。しかし、先程見たように、懷徳堂黎明期における父の持軒や石庵による『論語』講義では、反復学習こそが重視されていた。然るに、蘭洲は反復学習を軽視する解釈を徂徠によって提示されても、そのことについては反応しない。蘭洲は、「時に之れを習ふ」の句から不断に行う反復学習の推奨を読み取ることに、石庵や蘭洲ほど積極的ではなかったと言うことはできよう。

ところで、蘭洲『非物篇』を補う目的で作成されたのが中井竹山『非徴』であるが、やはり竹山も当該箇所における蘭洲の徂徠批判には足りないものを感じたようである。そこで、改めてこの問題を取り上げている。

『徴』に曰く、時に習ふは、既に以て「時時」「重習」と為し、又た以て「時として習はざる無し」と為す。朱子の解経は、特操無き者と謂ふ可きのみ、と。

非に曰く、朱子の解経は、謙遜にして長厚、務めて先儒の説を援き、其の得る所無く、有りて従ひ難きに与るに至り、而る後に始めて憶説を立つ。故に『集注』の並びに旧説を載する者は、徃徃にして相ひ須^まちて発す。或いは本文の余意を広め、或いは一説に備へ、学者をして参考して以て自づから得さしむ。是の章の程謝の説の如き、朱子自づから明辨有りて曰く、伊川は専ら思の字に在り、上蔡は専ら力行に於いてし、皆な偏するに似たり、と。又た曰く、謝説は乃ち習の字を推广す、と。陳新安も亦た曰く、謝氏の「時」字を言ふは、「時時」の意と異なれり、と。朱子姑く采り、以て一説に備ふるのみ。是れ何ぞ特操無きこと之れ有らん。渠の殊見を驚^{おど}せ、先儒を排し、力めて新奇の説を創り、自ら稽ふる無きを恥ぢず。或いは先説を窃みて、以て柏盲の徒を誑し、謙厚の風、地を掃きて索^{もと}ぐる者、朱子解経の法と、固より年を異にして道^いふなり。若し夫れ『徴』の「時時」「重習」を以て童子の事と為し、天子諸侯の礼、得て習ふ可からざるを以て、「時として習はざる無し」を駁すは、其れ拘迫拗^{あつ}にして、盖し辨ずるに違あらず。〔『非徴』卷之一（注22）〕

竹山は、朱子が二つの解釈を提示していることを擁護する。竹山に言わせると、朱子の解経方法は先賢を尊ぶという謙遜の意により、努めて先儒の学説を援用しており、納得できない時になって初めて自分の考えを打ち出すというものである。よって、旧説が並記されているのも、学習者に自得を促すための参考として掲げられているに過ぎないと言つ。

このように、朱注の中に複数の見解が存在することを竹山は弁護し、その上でこの「時に之れを習ふ」の箇所では、朱子や先賢の説明に基づいて、程頤は「思」に、謝良佐は「習」に偏っているというように、重視してい

る点が異なっており、また謝良佐の用いた「時」字は朱子の言う「時時」とは異なっているが、朱子は一説として掲げていたに過ぎないとする。これを要するに、竹山に言わせると、複数の学説を提示することはむしろあるべき姿なのであり、よって徂徠の批判は当を得ていないということになる。

しかし、この竹山の反駁にしても、奥歯に物が挟まった感じがする。徂徠が反復学習の注解を不十分としたことについて、竹山は結局何も語っていない。蘭洲と竹山とは徂徠『論語徴』の朱子批判に反駁するという名分によって筆を執っているにも拘わらずに、である。

すると、竹山は言外ながらも謝良佐流の理解、即ち折々行うことを通じて何がしかのことを習ってゆくという解釈に寄せて当該箇所を理解していたのではないか、という推測が浮かび上がってこよう。石庵・持軒に見られた懷徳堂黎明期における反復学習の重視は、蘭洲以後に逆転し、軽く評価されるようになっていったのではないかと思わせてくれる。果たしてこの推測を裏付けるかのように、中井履軒が明瞭な見解を提示している。

五 中井履軒の解釈

中井履軒の経学は『七経逢原』に大成されている。その中の『論語逢原』において、「時に之れを習ふ」の句を履軒は次のように解説している。

「習」は則ち駸駸として行ひに入る。当に「之れを学びて已まざる」を以て「習」を為すべからず。鳥の雛や稍や長じ、飛ばんと欲し、而れども未だ能はず。且しほらく樹枝を尋ね、咫尺の飛を作し、頻りに上下左右す。之れを「習」と謂ふのみ。程説の「重ね習ふ」も、亦た

「之れを学びて已まざる」と謂ふも、未だ允あたたらず。「思繹」・「浹洽」も、亦た「習」に非ず。宜しく脩行の上に在りて、解を著すべきのみ。

「時」は、「時に措く」の「時」の如し。其の時に当たりて嘗て学者を脩行するを謂ふ。譬へば礼を学ぶが如し。「剣を進むるに首を左にし」、「玉を受くるに掬を以てす」。既に嘗て学べば、乃ち授受の時に当たり、而て其の学ぶ所の「左首」・「以掬」を脩行するは、是れなり。其の他「色を柔らぐ」・「声を怡す」・「唯して諾せず」・「敢て疾怨せず、起に敬し起に孝す」の類ひ、皆自然らざる莫し。未だ「時」を以て解すべからず。古へ「時」を以て「時時」と作して用ゐる者無し。又た「十二時」の「時」に非ず。謝註に、「坐する時の習ひ」・「立つる時の習ひ」と。之れを得。但だ「時として習はざる無し」の句のみ、之れを失す。（『論語逢原』学而（注23））

履軒は、「習」の意味を実践的行為に限定して思索的行為を排除し、「之れを学びて已まざる」といった絶え間なく学び続けるという理解をしてはならないとする。よって、「重習」即ち繰り返し何度も復習するという解釈も否定されることになる。

その上で、「時」字は『中庸』第二十五章「故に時に之れを措きて宜しきなり（注24）」を参考にして解釈すべしとする。履軒が「時措」を『中庸逢原』において「言ふところは時に随ひて之れを措き、内外時に随へば皆な宜しく、時無くんば宜しからざるなり（注25）」と解説していることに基づけば、その行為をするにふさわしい時分に、以前に学んだことを実践の場で行うことこそが「時に之れを習ふ」の意味ということになる。よって、謝良佐の坐るとき、立つ時に習ふという見解は妥当とするものの、「時とし

て習はざる無し」という「絶え間なく常に」につながっていく理解は当たっていないとして批判するのである。

ところで、履軒の説明の中で興味深いのは、鳥の雛に関してである。「時に之れを習ふ」の句の説明に鳥を持ち出したのは朱子であるが、既に見てきたように、朱子にあつては鳥が飛んではどこかに止まりまた飛んでいくというように、動作の繰り返しの比喻として持ち出されていたに過ぎない。それに対し、持軒は『大全』の記述を踏まえて鳥をヒヨコに読換え、雛鳥が飛ぶ練習にひたすら励んでおる内にやがて飛べるようになるという、弛まぬ反復練習による技能の獲得として説明していた。

そして、履軒も雛鳥を持ち出しているのであるが、しかし、その語り口は持軒と些か差異が認められる。履軒は、鳥の雛が飛ぼうしても飛べず、木の枝をたどっては少しだけ飛び、さかんに上下左右する様が「習」であり、「習」にそれ以上の意味はないとする。持軒が繰り返しの動作を「ヒタモノ」即ちひたすら行うことを学習者に重要事として強調していたのに対し、履軒の説明は、雛鳥の日常生活の描写になっており、ひよこひよこ動き回る日常そのものが「習」とされる。そこに求道的姿勢は見出し難い。

これを要するに、「之れを学びて已まざる」「時時」「時として習はざる無し」を否定した履軒にとって、わざわざ練習のために繰り返し繰り返し同じ動作を行うことは、無意味であったということになる。ある動作に習熟したければ、その動作を行う必然性がある時に、かつて学んだことを日常の実践の場で実行することで「習う」のである。

なお、履軒の解釈は、『逢原』以前に『七経雕題』・『七経雕題略』がある。『雕題略』は『雕題』における自身の注解を整理したものであり、『論語』の解釈も、『論語雕題』・『論語雕題略』・『論語逢原』を並べることで、思索の道程を辿ることができる。確認してみると、履軒の「時に之れを習ふ」

の句の理解は、『雕題』から『逢原』まで、概ね一致している。

但し、「時として習はざる無し」の句について、『雕題』では「未だこころよ 恆こころよからず似たり（注26）」とあつて積然としないという評価、『雕題略』では「亦た太だ急迫す（注27）」とあつて差し迫り過ぎであろうという評価である。『逢原』では「之れを失す」と一刀両断にしており、リゴリスティックな学習観念に対して、履軒は年を重ねるごとに忌避感を強めていった様子が覗える。

こうした履軒の解釈を一言で表すならば、生活と学習との一体化である。日常の起居や儀礼と切り離して行われる反復練習は、実は非日常の行為でもある。練習として以外の意味も目的も無い以上、それは学んだことの実践であるとは実は言い難い。懷徳堂が知行における行を重視していたことは石庵以来一貫していたことであるが、しかし、練習行為を重視すればする程、行為の実践から離れてしまうという事態を招いてしまう。

そこで、履軒はその日常から切り離された練習行為を否定する。ここにおいて、絶え間ない反復学習は姿を消すことになり、以前に学習したことを日常における実践を通して復習してゆくことになり、そしていつの間にか上達していることになる。しかも、四六時中何かを学び続けていなければならぬという重圧感を抱く必要もない。日常生活そのものを学習の場に転化させ、両者を融合させてしまうのであるから、学ぶ意欲のある者は、復習時間を別に設けて繰り返し繰り返し練習する必要もなく、ただ日々の行いを疎かにしなければそれで良い。学習者にかかる精神的・時間的負担は大きく減少することになる。かくして、石庵・持軒による絶え間ない反復学習の重視は、履軒に至って完全に否定される。しかのみならず、「習」の内容も思惟的ではなく行為の実行に限定されており、期せずして徂徠と同じ方向性に落ち着くのであった。

おわりに

本論では、懷徳堂における『論語』首章「時に之れを習ふ」の理解について、その変遷を検討した。当該箇所を理解としては、朱子によって、写字練習に代表される反復学習と、その時々に行う各種動作の実践を通じて学ぶという、二種類の解釈が提示されていた。その上で朱子は、二種類の学習観念の根底に共通する不断の学習を学習者に強いた。これに対して、荻生徂徠は朱子が二つの解釈を提示したことを節操に欠けると批判し、自身は基本的に朱子が挙げた後者の理解を妥当とする。

翻って懷徳堂では、黎明期の三宅石庵・五井持軒は、絶え間なく反復学習することに重点を置いて当該箇所を講義していた。ところが、朱子学を軸として徂徠学を批判するという懷徳堂の気風を確立した五井蘭洲、そして蘭洲に学んだ中井竹山には、石庵や蘭洲ほどには反復学習を重視する姿勢が欠けており、竹山の弟の中井履軒に至っては、絶え間ない反復学習を否定するに至る。履軒により、生活から切り離された練習時間を設ける必要がなくなり、日常の起居や儀礼がそのまま、以前に学んだことを振り返って修行する場となった。ここに生活と学習とが一体化されることになったのである。

しかも、履軒においては「習」の内容は明確に思索的復習が否定され、動作の実践に限定される。懷徳堂学派における「時に之れを習ふ」の解釈の帰着点を巨視的に眺めてこれを思想上に位置付けると、実は徂徠の軸線上に乗っていたのであった。

ところで、懷徳堂に学んでいた庶民の目線でこうした懷徳堂の学習観念を評価すると、日常生活そのものが学習の舞台となり、殊更に反復練習の

時間を設けなくて済むのであるから、学習の負担が大いに減じることになる。これにより、庶民は学習をより身近で日常のものとして感じることができたであろう。町人の世界に立脚していた懷徳堂の面目躍如と評せようか。

注

- (1) 『論語注疏』(阮元校勘嘉慶二十年重刊宋本『十三經注疏』八、中文出版社、平成元年)、五三三三頁。
- (2) 加地伸行『論語 増補版』(講談社、平成二十一年)、十七頁。
- (3) 金谷治『論語』(岩波書店、第一刷昭和三十八年、改訂第一刷平成十一年)、十九頁。
- (4) 宮崎市定『現代語訳 論語』(岩波書店、平成十二年)、一頁。
- (5) 宇野哲人『論語新釈』(講談社、昭和五十五年)、十五頁。
- (6) 王曰、「時」者、學者以時誦習之。誦習以時、學無廢、所以爲說懽。」(『論語注疏』五三三三三頁)。なお、原文の引用に際し、筆者の判断により適宜句読点や鈎括弧等の記号を附している。以下同じ。
- (7) 子曰、「道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。」包曰、「作使民必以其時、不妨奪農務。」(『論語注疏』五三三四頁)。
- (8) 「習」、鳥數飛也。學之不已、如鳥數飛也。……既學而又時時習之、則所學者熟、而中心喜說、其進自不能已矣。程子曰、「習、重習也。時復思繹、浹洽於中、則說也。」又曰、「學者將以行之也、時習之、則所學者在我、故說。」謝氏曰、「時習者、無時而不習。坐如尸、坐時習也。立如齊、立時習也。」(『四書章句集注』、中華書局、西曆一九八三年、四十七頁)。

(9) 只是飛了又飛。〔朱子全書 修訂本〕十四、上海古籍出版社・安徽教育出版社、西曆二〇一〇年、六七一頁。なお、『朱子語類』の引用に際し、現代語訳は筆者が行った。以下同じ。

(10) 問、「如何是時習。」曰、「如寫一個「上」字、寫了一個、又寫一個、又寫一個。」當時先生亦逐一書此「上」字於掌中。〔朱子全書 修訂本〕十四、六七一頁。なお、現代語訳中の「」による補足は筆者による。

(11) 『礼記注疏』〔阮元校勘嘉慶二十年重刊宋本〕十三經注疏〕五、中文出版社、平成元年、二六五九頁。

(12) 「習」訓「重習」、亦爲纏繞。學習固有重複之義。然重複豈能盡學習之義乎。「時習之」、既以爲「時時」「重習」、又以爲「無時不習」。朱子解經、可謂無特操者已。「時時」「重習」、僅爲童子受句讀者事。「無時不習」、則天子諸侯之禮、宗廟軍旅冠昏喪祭、皆不可得而習之矣。故唯「坐如尸、立如齋」、可見其說之窮已。〔荻生徂徠全集〕三、みず書房、昭和五十二年、十七頁。

(13) 「時習之」、王肅曰、「以時誦習之。」『傳』曰、「春誦、夏絃、秋學禮、冬讀書。」其習之亦如之。〔荻生徂徠全集〕三、十一頁。

(14) 『礼記注疏』三〇三九頁。

(15) 湯淺邦弘・杉山一也・竹田健二他「懷德堂文庫所藏『論孟首章講義』について」デジタルコンテンツとしての位置づけ」〔中国研究集刊〕二十七、平成十二年、四十八〜四十九頁。なお、和書の引用にあたっては、合略仮名は現行表記に改め、漢字体も新字体を原則とした。以下同じ。

(16) 『荻生徂徠全集』四（みず書房、昭和五十三年）、七一三〜七一六頁。

(17) 湯淺邦弘編『増補改訂版 懷德堂事典』（大阪大学出版会、初版平成十三年、増補改訂版平成二十八年）、六十四〜六十五頁。

(18) 『論語聞書』（大阪大学附属図書館懷德堂文庫蔵）、三葉表〜七葉表。

(19) 厚齋馮氏曰、習鳥雛欲離巢而學飛之稱學。〔和刻本四書大全〕三、中文出版社、

平成四年、五十二頁。

(20) 徂来又曰、「時習之」、「傳」曰、「春誦、夏絃、秋學礼、冬學書」。其習之亦如之。是學究之見耳。孔門教人、豈若此拘之乎。王應麟曰、「伏生『太傳』云、周公思兼三王之道、以施於春秋冬夏。其說陋矣」。今此解亦倣伏生之耄也。（大阪大学懷德堂文庫復刻刊行会監修『非物篇』、懷德堂文庫復刻叢書二、吉川弘文館、平成元年、七頁）。

(21) 『困學紀聞』四（国字基本叢書、台湾商務印書館、中華民國四十五年）、七〇二頁。

(22) 『徵』曰、「時習、既以爲「時時」「重習」、又以爲「無時不習」。朱子解經、可謂無持操者已。非曰、朱子解經、謙遜長厚、務援先儒之說、至於其無所得、與有焉而難從、而後始立憶說。故『集注』並載舊說者、往往相須而發。或廣本文餘意、或備一說、令學者參考以自得焉。如是章程謝之說、朱子自有明辨曰、伊川專在思字、上蔡專於力行、似皆偏了。又曰、謝說乃推廣習字。陳新安亦曰、謝氏言「時」字、與「時時」之意異。朱子姑采、以備一說耳。是何無特操之有。渠之驚殊見、排先儒、力創新奇之說、不自恥於無稽。或窃先說、以誑柏盲之徒、謙厚之風、掃地而索者、與朱子解經之法、固異年而道也。若夫『徵』以「時時」「重習」爲童子事、以天子諸侯之禮、不可得而習、駁「無時不習」、其拘迫扞戾、盖不遑辨矣。（大阪大学懷德堂文庫復刻刊行会監修『非徵』、懷德堂文庫復刻叢書一、吉川弘文館、昭和六十三年、十一頁）。

(23) 「習」則駸駸入乎行。不當以「學之不已」爲「習」。鳥雛稍長、欲飛、而未能。且尋樹枝、作咫尺之飛、頻上下左右焉。謂之「習」耳。程說「重習」、亦謂「學之不已」也、未允。「思釋」・「澁洽」、亦非「習」。宜在脩行上、著解而已。「時」如「時措」之「時」。謂當其時脩行嘗學者。譬如學禮。「進劍左首」、「受玉以掬」。既嘗學焉、乃當授受之時、而脩行其所學之「左首」・「以掬」、是也。其他「柔色」・「怡聲」・「唯而不諾」・「不敢疾怨、起敬起孝」之類、莫不皆然。未可以「時時」

解焉。古無以「時」作「時時」用者。又非「十二時」之「時」。謝註、「坐時習」・「立時習」。得之。但「無時而不習」句、失之。〔日本名家四書註釈全書〕六、鳳出版、昭和四十八年、十頁）。

(24) 故時措之宜也。(池田光子「中井履軒『中庸逢原』解説及び翻刻附集注」、『大阪大学大学院文学研究科紀要』四十九、平成二十一年、九十頁)。

(25) 言隨時措之、内外隨時皆宜、無時不宜也。(池田光子「中井履軒『中庸逢原』解説及び翻刻附集注」、九十頁)。

(26) 似未愜。(大阪大学懷徳堂文庫復刻刊行会監修『論語雕題』、懷徳堂文庫復刻叢書九、吉川弘文館、平成八年、九頁)。

(27) 但無時而不習句、亦太急迫。〔論語雕題』、一七七頁)。

黒田 秀教 (くろだ・ひでのり)

一九七六年生まれ。福井大学教育学部准教授。専門は日本近世思想史。主要論文に「懷徳堂の統治論―徂徠学との思想的接続―」〔『日本中国学会報』第七十二号、二〇二〇年十月)、「中井竹山に見る懷徳堂の漢作文―達意を軸として―」〔『新しい漢字漢文教育』第六十八号、二〇一九年六月)など。